

1977年(昭和52年)10月26日

カセイソーダの交換膜法 直ちに採用は無理

専門委結論

関係筋が二十五日明らかにしたところによると、カセイソーダ製法転換の方針を決めるため、イオン交換膜法の技術評価を行っていた技術評価専門委員会(委員長・吉沢四郎京大教授)は同日までに「技術水準はかなり高くなっているが、まだ確立されたとはいえず、いまだ本格的に採用するには無理がある」との結論を達した。二十八日に開かれる予定のソーダ工業製法転換推進対策委員会(通産省基礎産業局長の私的諮問機関)に報告し、同推進対策委が

正式に結論としてまとめる。カセイソーダの製法については、水銀槽に代表される水銀公害を避けるため、政府は五十三年三月末までに、水銀を使わない方法に全面転換させる方針を決めていたが、技術上の困難を理由に延期を求めた通産省の主張が通り、新しい転換完了の期限は、専門家によるイオン交換膜法の技術評価を行ってうえで決めることになった。直ちに本格採用するのは無理、との結論が出たことにより、製法の全面転換が終わるのは当初の目標より、二三年は遅れることがほぼ確実となった。業界は従来、水銀法から水銀を使わないアースト膜法に転換してきたが、アースト膜法はコストが高いのに、製品の純度が低く、カセイソーダ需要の約三〇%を占める化学繊維やセロファン原料に使えないという欠点があることがわかった。このため、取

府は、まだ転換がすすんでいない約四〇%の水銀法工場は新しい技術で純度の高い製品が作れるイオン交換膜法にできるだけ早く転換させる方針を決め、十月末までに技術評価をしたうえで、具体的な転換スケジュールを定めることになっていた。

関係筋によると、技術評価専門委員会は、イオン交換膜法でできるカセイソーダの純度は極めて高く、品質面ではほとんど問題がないと評価している。ただ、実用化の二つの目安として、実際にプラントを運転する際のイオン交換膜の耐用年数が、二三年程度は必要なのに、いまのところ一年程度のものしか開発されておらず、イオン交換膜の供給能力、供給体制とも若干の問題が残っていることなどから、同専門委員会は「実」た技術的に確立されたとはいえず、もう少し様子を見る必要がある」との結論を達した。